

国語教材における図版類の活用法 —理解補助から読解指導へ—

井上次夫¹⁾

(2016年9月29日受付, 2016年12月15日受理)

Strategies for Using Illustrations in Japanese Language Teaching Materials:
Applications to Teaching Reading Comprehension

Tsugio INOUE¹⁾

(Received : September 29, 2016, Accepted : December 15, 2016)

要 旨

本稿は、国語教材とともに教科書に掲載されている図版類の活用法を分類し、有効活用の方法を示す。通常、図版類は難解な語句や教材内容の理解を視覚的に補助するために利用される一方で、稀にその図版類が教材内容への学習者の関心・意欲を損ね、混乱を招くことがある。しかし、その場合でも適切な図版類を新たに加えて提示することにより、いっそう掘り下げた読解へと導くことができる。つまり、図版類を有効に活用することで学習者の関心・意欲を引き出すだけでなく、教材内容の理解以上の深い読解が可能となる。その要諦は、使用教科書の図版類の有無や種類を吟味し、語句補助、内容補助、内容確認、内容比較といった活用法の観点から、より適切な図版類を求めるとともに活用法を工夫することである。

キーワード：国語教材、読解指導、図版類、関心・意欲

Abstract

This paper discusses the effective use of visual illustrations presented along with Japanese language teaching materials. Typically, illustrations are employed as a visual learning aid, for example to explain difficult words and phrases or facilitate the understanding of the content of textbooks. On the other hand, in some cases these illustrations can reduce the student's interest in the content or lead to confusion. Even in such cases, however, deeper comprehension can be expected if the student is presented with appropriate illustrations. In other words, if used effectively, illustrations not only bring out the student's interest and motivation, but also facilitate reading comprehension for a deeper understanding beyond the instructional content. The main point is therefore for teachers to examine the types of illustrations in textbooks and to find illustrations that are appropriate.

The strategies described in this paper can then be used as a reference to devise their own strategies.

Key words: Japanese language teaching materials, teaching reading comprehension, illustrations, interest and motivation

1) 高知県立大学文化学部 教授 Faculty of Cultural Studies, University of Kochi, Professor

1. はじめに

国語教材は言語で表現されており、言語によって理解されるものであるが、その理解を補助する機能を果たすものとして視覚的な図版類がある。この図版類は、活用次第で学習者の教材への強い関心・意欲を引き出し、また理解以上の深い読解へと導くことができる。しかし、その活用法は個々の実践報告で部分的に示されるだけで、管見の限り、整理され一般化されているとは言えない状況である。そこで、本稿では教科書における図版類の有無や種類の実態を検討し、国語教材における図版類の活用法を分類し具体例を示すとともに、使用教科書以外にも図版類を求めて活用する手立てを提案する。

以下、第2章では国語教材とともに掲載されている図版類の状況を観察した後、図版類が持つ基本機能である理解補助について分析する。第3章では中学校・高等学校における主に文学的な文章や古典教材を対象とする授業実践例を広く取り上げ、従来の理解補助から新たな深い読解へと導く図版類の活用法について分類し、その実際を示す。

2. 国語教材の図版類

2.1 教科書の図版類掲載状況

本稿における図版類とは、教科書に掲載された挿絵、カット、地図、絵図、写真、図表などの視覚資料全般をいう。それら図版類は、教科書会社ごとに適宜、掲載しているため、教科書会社が異なれば掲載されている図版類が異なることは珍しくない。つまり、同じ教科書会社の同じ科目であっても、例えば、高等学校「国語総合」における「新編」「精選」、「現代文編」「古典編」の分冊のように、教科書の種類が異なれば、掲載される図版類の有無や種類の異同が生じている。いま、手元の「国語総合」教科書3種^{注1}の教材「羅生門」に掲載されている図版類について調べてみると、表1の通りである。

また、他の教科書の「羅生門」の図版類を調べてみると、表1に示したものの以外に、例えば、平安時代の門（『伴大納言絵巻』）、やもり、執筆当時の芥川龍之介の図版類があたりなかつたりする。このように、同じ教材であっても、教科書によって掲載されている図版類の有無には異同がある。

そして、図版類の種類も必ずしも同一ではなく、教科書による異同がある。例えば、表1の6「鴟尾」の場合、脚注の「宮殿・仏殿などの棟の両端に据えられた魚の尾の形をした装飾」という説明にはさほど異同はないが、図版類の種類にはカラーと白黒、カットと写真、尾の向きが左と右などの異同がある。また、4「市女笠」や5「揉烏帽子」にも絵図、カット、模型写真など種類の異同がある。

なお、本文での「市女笠」「揉烏帽子」は換喩であるため、脚注でそれぞれ「漆塗りの菅笠。ここでは、それをかぶった女のこと」「漆を薄く塗り、揉んでやわらかくした烏帽

表1 教材「羅生門」の図版類（○：有 —：無）

図版類	明解	精選	現文編
1. 平安京略図	—	—	○
2. 平安京復元模型	○	—	—
3. 羅城門復元模型 ^{注2}	○	○	○
4. 市女笠（イチメガサ）	○	○	○
5. 揉烏帽子（モミエボシ）	○	○	○
6. 鴟尾（シビ）	○	○	○
7. 築土（ツイジ）	○	—	—
8. 火桶（ヒオケ）	○	○	○
9. 檜皮色（ヒワダイロ）	—	○	○
10. 『羅生門』初版本表紙	—	○	○
11. 作者（芥川龍之介）	○	○	○

子。ここでは、それをかぶった男のこと」(下線は筆者)と説明した上でその女や男のカットを掲載している。しかし、市女笠や揉烏帽子という物の説明だけをして市女笠をかぶった女や揉烏帽子をかぶった男のカット、また揉烏帽子だけのカットを掲載している教科書には、提示方法の改善が望まれる。

しかし、これら図版類の有無や種類の異同等が教材「羅生門」の読解に及ぼす影響は図版類が持つ補助的役割から考えて、重大なものかと言えば必ずしもそうだとは言いきれないだろう。また、仮に授業者が必要と考える図版類が使用教科書に掲載されていない場合には、補助教材の『国語便覧』や Web などから適宜、必要なものを入手して補助資料とすれば読解指導に際しては特に問題もないと思われる。実際、某社の『国語便覧』は、黒澤明監督映画「羅生門」の荒廃した羅城門の写真、作品『羅生門』の草稿ノートの写真、聖柄の太刀の絵図、山吹色の画像、わら草履の写真などを参考資料として掲載しており、授業者にとってはそれらを有効に活用することができる状況にある。

なお、手元の教科書の教材「羅生門」には見当たらないが、かつては羅生門の下で雨やみを待つ下人や老婆の挿絵などを掲載する教科書があった。これについては後で触れる(3.5.3)。

2.2 図版類の基本機能

先に、国語教材は言語で表現されており、言語によって理解される対象であると述べたが(1)、図版類のほうは基本的に教材の理解を視覚的に補助することを目的に掲載されている。そして、教材本文とともに掲載することで、学習者にとって難解と思われる語句や内容についての理解に役立てられている。

以下、図版類の基本的な機能と言える「理解補助」の機能について、小学校、中学校、高等学校の校種順に適宜、文学教材や古典教材を例としてみていく。

最初に、小学校5年生の教材である椋鳩十「大造じいさんとガン」(「大造じいさんとがん」)の図版類をみると、教科書会社5社(東京書籍、学校図書、三省堂、教育出版、光村図書)すべてが挿絵だけである。挿絵の数は場面ごとに4~7カットを配している^{注3}。それらの挿絵は基本的に教材内容の理解を補助するための視覚資料として掲載され、そのように機能しているものと思われる。そして、有働(2012:58)が小学校2年生の教材「スイミー」について述べるように「幼い読者にとって、豊かな読みの道筋をつけることが何より必要なこと」であり「教科書教材の挿絵を用いた場合、その挿絵が完全だとはいえないが、主人公の心象に沿って読み進めるためにはそれらを用いた指導は必要なこと」となっている。

次に、中学校1年生の教材「竹取物語」の図版類をみると、小学校と同じ5社すべての教科書が『竹取物語絵巻』から各場面の絵図を適宜、選択して掲載している^{注4}。なお、東京書籍の教科書(東書版。以下、他社の場合も同様)は、それに竹や月、富士山のカットを加えている。また、学図版以外はそれぞれの絵図に「大切に育てられるかぐや姫」「蓬萊の玉の枝を持参したくらしの皇子」「かぐや姫を迎えに来た帝の使い」「月を見て嘆き悲しむかぐや姫」「天に昇るかぐや姫」などの説明を付けている。このことから明らかのように、教材「竹取物語」の図版類は、本文内容の絵画化(視覚化・ビジュアル化)を通じて教材内容の理解を補助することを目的に掲載されており、その機能を果たしている。

さて、高等学校では先に2.1で取り上げた教材「羅生門」の図版類を再び検討する。表1をみると、平安京の地図や羅城門の模型写真、市女笠や檜皮色など小説の舞台である平安時代末期の京都や人物、事物など現代の高校生にとって理解が難しいと思われるもの、また『羅生門』初版本や芥川龍之介など作品や作者への関心を引くものとして図版類を掲載している。一方、教科書の脚注にある「襖(アヅ)」 「弩(イミ)」にはそれぞれ「脇を開けた仕立ての庶民の服」「ばね仕掛けで矢や石を発射した大型の弓」といった説明はあるが、それらの図版類を掲載する教科書はほとんどない^{注5}。こうしてみると、図版類は「平安京

略図」や「檜皮色」の場合に典型的なように、言語による説明よりも視覚化した図版類のほうが教材内容を理解するために効果的だと思われるものを優先的に掲載していると言えるだろう。

以上から、図版類は、教材本文の内容理解を補助するために有効な視覚資料として機能することを目的に掲載されていることが確認される。ただし、教科書会社は図版類の掲載に際しては、編集方針や紙幅・経費等の関係、また学習者の理解に資する程度の予測などから図版類の選択（何カット掲載するか・掲載しないか）や種類の選択（挿絵、カット、絵図、写真などいずれを掲載するか）などにおいて編集上の判断を行っているものと思われる。

3. 図版類の活用法

ここでは、国語教材とともに掲載された図版類は、学習者を深い読解に導く手立てとしてどのように活用することができるか、という観点から行った図版類の活用法の分類を具体例とともに示す。

3. 1 理解補助（語句補助・内容補助）

理解補助とは、学習者の理解を支援する目的で掲載された図版類を使用するという基本的な活用法である。これは、語句の意味の理解を補助するもの（以下、語句補助）と教材本文の内容の理解を補助するもの（以下、内容補助）とに分けることができる。

表1でみた教材「羅生門」の図版類は、その多くが語句に関するものであった。このことから分かるように、語句補助では、学習者である現代の高校生にとって未知または難解と思われる語句、誤解を招くと思われる語句について視覚化した図版類を用いて、その意味理解を手助けする。一方、表1の1「平安京略図」は、平安京それ自体を正確に理解する目的だけのものではないことは言うまでもない。羅生門（羅城門）が平安京の正門であり、朱雀大路の南端に位置することを略図から知るとともに、この教材の文脈においてこの門が都の内と外の世界を区切る境界であること、そのことが持つ意味を理解することが求められている。だからこそ、作者が設定した羅生門という場所が担う本教材における象徴的意味を理解するために「平安京略図」は活用することができ、理解補助の機能を果たすと言える。なお、羅生門の図版類としては、京都文化博物館蔵「羅城門復元模型」や黒澤明監督映画「羅生門」の羅城門の写真に掲載する教科書があるが、前者は門の鴟尾、葺、丹塗りの丸柱、築土の説明、後者は雨の中の荒廃した羅生門の雰囲気を表す本文中の語句について説明する際、語句補助として活用することができる。

次に、内容補助については、先に2.2で取り上げた教材「大造じいさんとガン」や「竹取物語」の場合をみると、絵画化された図版類は物語のプロット（筋立て）の理解に役立っており、児童生徒が本文内容を理解するために活用することができる。ただし、掲載されている図版類の挿絵や絵図の種類、カット数などは内容読解に影響することもあり得るため、その効果については別途、検討する必要がある。

その他、内容理解のための内容補助として、例えば、地図への経路の書き込みを挙げることができる。いま、高等学校「現代文B」の教材である夏目漱石「ころ」の図版類をみると、小説の舞台となった明治30年頃の「本郷周辺略図」を多くの教科書が掲載している。そこで、主人公「私」の下宿や大学の所在地を確認するだけでなく、「私」がお嬢さんとの結婚を奥さんに談判した後に歩き回った経路（下「先生と遺書」46）を学習者に地図で辿りながら図中に書き込ませる。すると、本文中にある通り、確かに「いびつな円」がそこには描かれる。このような内容補助によって「私」の中に存在する「いびつな」心も浮かび上がり、それを明確に読み取ることができることになるのである。

そのような地図を用いて登場人物の彷徨の経路を辿ることは「現代文 B」の教材である森鷗外「舞姫」においても有効である。主人公の太田豊太郎はエリスをドイツに残し帰国することを天方大臣に約束した後、夜の雨の中をカイゼルホオルホテルから帰宅する。この経路を教科書掲載の「19世紀末ベルリン市街図」の中に書き込むと、豊太郎が自責の念に苦しむ錯乱状態でさまよったことを浮き彫りにできる。

以上のように、図版類には難解な語句の意味や教材本文の内容理解を視覚的に補助する機能がある。そして、語句補助や内容補助の視覚資料として有効に活用することができる。

3. 2 内容確認

内容確認とは、学習者による教材内容の理解を確認するために教科書の図版類を活用する方法をいう。この内容確認には、選択確認や異同確認を挙げることができる。

まず、選択確認の例として、高等学校「古典 B」の教材「若紫」（『源氏物語』）を挙げる。阪本（2010）は、「小柴垣のもと」の場面に掲載されている図1（京都国立博物館蔵・土佐光吉筆『源氏物語画帖』）に着目し、絵図に描かれた人物（女4、男2）がそれぞれ誰であるかを教材本文の登場人物（尼君、若紫、犬君、乳母、光源氏、惟光）の中から選択させる「挿絵の人物当てクイズ」を実践している。そして、口語訳抜きで原文に当たらせるその活動は古典をそのまま理解させるのに有効であるという。確かに図中の人物と本文中の登場人物を結び付けるためには、登場人物の性別や年齢、行動や立ち位置、中の柱・脇息・扇といった語句の意味、そして女性の髪形・装束・顔の描写などについて文脈に即して仔細に読み取る必要がある。その結果、学習者による本文の内容理解を進めさせ、授業者はそれを確認することができるようになる。また、阪本（2010：57）が指摘するように安土桃山時代の絵師・土佐光吉筆による図1では、この邸の床が平安時代当時の全面板張りではなく全体が畳敷きに描かれていることに気付くことにもなり、その結果、絵師が生きた安土桃山時代についての知識や価値観に目が向くことにもなる。

そして、図中に描かれた人物を教材本文中の登場人物から選択させて確認するこのような方法は、教材「芥川」（『伊勢物語』）に掲載されている異時同図法で描かれた異本『伊勢物語絵巻』^{注6}の場合においても内容確認として同じく有効な活用法であると思われる。

次に、異同確認の例として、先の2.2で触れた教材「竹取物語」の図版類を挙げることができる。このうち、2006年度版中学校国語教科書のかぐや姫の昇天図について検討した中島（2007）は、教出版に掲載された深井国氏による挿絵が、それ以前に掲載されていた井口文秀氏の挿絵と比較した結果、天人がいないこと、装束や車が和風であること、かぐや姫が翁と媼を見返ることなどから、生徒に誤解を与える可能性があるため、取り扱う際には注意が必要であることを指摘した。なお、現行の教出版（2016年度）では國學院大學附属図書館蔵『竹取物語絵巻』（江戸時代前期）の図2に変更して掲載している。しかし、かぐや姫は、翁と媼を見返らないものの、天人は描かれず、天の羽衣ではなく女房装束で描かれている。

また、光村版・三省堂版が掲載する国立国会図書館蔵『竹取物語絵巻』の図3や他の教科書に掲載の絵巻の昇天図の場合でも『竹取物語』の本文を示した上で、図と本文との異同確認を行うことにより内容理解を深めることができる。



図1 若紫『源氏物語』



図2 かぐや姫の昇天（教育出版）



図3 かぐや姫の昇天（光村・三省堂）

3. 3 内容比較

内容比較とは、学習者による教材内容の理解を深めるために教科書掲載の図版類以外の図版類を新たに追加して活用する方法をいう。これは、複数の図版類を比較することを通じて学習者の疑問や発見を導き、理解内容に立ち戻らせることで理解を確かなものにし、読解をさらに深めることができるものである。

具体例として、中学校や高等学校でも登場する教材「竹取物語」を再び取り上げる。前項3.2の内容確認では使用教科書に掲載されている図2または図3のどちらか1つを対象に教材内容の確認を行ったが、内容比較においては図2と図3の2つを使用する。そして、まず両者を比較して異同を明らかにすることから学習を展開する。そこでは、かぐや姫の見返りの有無や装束、天人の有無や装束・持ち物、飛車は網代車か葱花車か、送迎の向きは左上か右上か、地上の様子などが比較の観点になる。そして、この活動を通じて学習者は古典の装束や乗り物などに目が向くばかりでなく、本文を丹念に読み込むことになる。

しかし、上述の観点について比較・確認するに際しては教材本文だけでは情報が不足する。このため、これを教材「竹取物語」から広げて作品『竹取物語』の本文に求めることになっていく。

特に、かぐや姫が地上の翁と媼を見返るか否かについて言えば、中島（2007：31）が述べるように、作品ではかぐや姫は「此国」で着ていた「衣」を自らの意志で脱ぎ、天人に「天の羽衣」を着せられた途端、翁や媼を思う気持ちを失い、背を向けたまま地上を見返らないまま昇天する。そして、感情も記憶もそのままに残された側は激しい喪失感を抱かざるを得なくなる。しかし、そのような『竹取物語』の本文を踏まえながらも、上掲の図2と図3の比較から自ずと明らかとなるかぐや姫が翁・媼を見返った場合と見返らなかった場合を比較することには、読解指導上の効果が期待できる。つまり、図2と図3のそれぞれの場面における、かぐや姫、翁・媼のそれぞれの別離の心情を考え、対比しながら話し合う活動によれば、教材「竹取物語」の主題の一つである親子の愛についての理解を深めることに至るのである。

ところで、内容比較という方法で図版類を活用するためには適切な図版類を複数、収集しなければならない。そこで、図版類の収集方法が問題になるが、まずは他社版の教科書や補助教材の『国語便覧』などを探索することである。すると、例えば「国語総合」の教材「奥山に、猫またといふもの」（後出）の場合、東書版などから図7、大修館版から図8を入手できる（3.4）。しかし、「若紫」（前出）の場合、教科書からは図1以外の入手が難しいため、Web上で探すと画像が鮮明なもの（図4）、構図が別のもの（図5）、和紙人形のもの（図6）の画像などを入手できる。このように、図版類の活用目的に応じて適切なものを提示できるように教材研究の段階で準備しておくことが望まれる。



図4 若紫 (鮮明)



図5 若紫 (別の構図)



図6 (和紙人形)

3. 4 内容吟味

内容補助、内容確認、内容比較が主に教科書掲載の図版類を用いて学習者による教材内容の理解を促す方法であった。これに対し、内容吟味とは、使用教科書に適切な図版類が掲載されていない場合、授業者が予め準備した図版類を用いて学習者の教材内容の理解を確認し、読解を深化させる方法である。

いま、高等学校「国語総合」の教材「丹波に出雲といふ所あり」(『徒然草』236段)をみると、奈良絵本^{注7}の『つれづれ草』(江戸時代前期)の絵図(図13)を掲載する教科書が少なからず存在する(3.4.1)。一方、桐原版のように狛犬と獅子の写真だけを掲載する場合もある。前者のように本文内容を絵画化した絵図がある場合、絵図は内容理解を補助する機能を果たしており、本文を読解する各段階で視覚情報から内容を予測したり確認したりすることができる点で有益である。

しかし一方で、内容理解の核心を絵図から学習者が即座に理解してしまい、その結果、本文への学習者の関心を損ねてしまい、学習意欲も学ぶ楽しみをも減退させるのではないかと危惧される場合がある。

例えば、前出の東書版の教材「奥山に、猫またといふものありて」(『徒然草』89段)の場合、奈良絵本の図7を見ると、本文を読まないうちに想像上の怪獣である「猫また」の正体が「(飼い)犬」であることが即座に判明してしまう。このような本文を読んで初めて謎の正体が明らかになる内容の教材では学習者に事前に絵図を見せることは避け、本文の読解後に内容確認として見せるほうが適切である。一方、大修館版では、「猫また」の正体が一見しただけでは「犬」と分かりにくい江戸時代の版本の挿絵(図8)を掲載している。どちらの図をどのように活用するかは学習者の実態を考慮して工夫することが必要となる。



図7 猫またの正体

さて、本文の内容を絵画化した図版類が教科書に掲載されていない場合を対象に、学習者による教材内容の理解を吟味させる図版類の活用法である内容吟味についてみていく。

まず、2016年度版中学校「国語」の教科書を見ると、教科書会社5社のすべてがB5版である。このため、カラーの図版類が本編に多く掲載されており見やすい。一方、A5版の高等学校「国語総合」の教科書も、中学校の場合と同様にカラーの図版類や古典の本文内容を絵画化した図版類が以前よりも増えているが程度差があり、中には図版類が全く掲載されていない教材も存在している。そのような状況を踏まえて「国語総合」



図8 奥山に猫またといふもの

の古典教材から『徒然草』の2つの段落を取り上げ、教科書に図版類が掲載されていない場合の内容吟味としての図版類活用法を具体的に提案する。

3. 4. 1 『徒然草』236段（獅子・狛犬）

『徒然草』236段は、「丹波に出雲といふ所あり」で始まる高等学校「国語総合」の古文教材である。調査した教科書9社23種のうち7社8種の教科書が本段を掲載している^{注8}。ここでは、桐原版の教材本文を以下に記す（下線は筆者。以下同じ）。

丹波に出雲といふ所あり。大社を移して、めでたく造れり。しだの某とかやする所なれば、秋のころ、聖海上人、そのほかも、人あまた誘ひて、「いざ給へ、出雲拝みに。かいもちひ召させむ。」とて、具しもて行きたるに、おのおの拝みて、ゆゆしく信おこしたり。

御前なる獅子・狛犬、背きて後ろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや、この獅子の立ちやう、いとめづらし。深きゆゑあらむ。」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。むげなり。」と言へば、おのおの怪しみて、「まことに他に異なりけり。都のつとに語らむ。」など言ふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、さだめて習ひあることにはべらむ。ちと承らばや。」と言はれければ、「そのことにさうらふ。さがなき童べどものつかまつりける、奇怪にさうらふことなり。」とて、さし寄りて、据ゑ直して往にければ、上人の感涙いたづらになりけり。

これは、島根の出雲大社から分霊した京都の出雲神社に参詣した聖海上人が、通常は見ることがない、背を向け合って置かれた獅子・狛犬にいたく感動した。しかし、実はそれは子どもたちのいたづらによるもので、上人の感動の涙は無駄になったという内容の笑話である。

桐原版は、脚注に「獅子・狛犬」を「神社の社殿の前などに置かれた一対の獣の像」という説明と「獅子・狛犬」のそれぞれの図版類を併置して掲載している。これにより学習者は「獅子・狛犬」の意味が理解できたとしても、本段の「獅子・狛犬」を本当に理解し読解できたと言えるかについては疑問が生じる。

そこで、この236段をWeb上で検索すると、現代語訳と図9の写真に掲載するホームページが存在する^{注9}。さらに、獅子・狛犬の図版類を求めたところ、図10に出会う。

そこで、本文に戻り、内容を吟味する。いくら複数の子どもの仕業といっても、図9や図10の獅子・狛犬を見る限り、子どもたちが「この」向き合って立つ獅子・狛犬の向きを変えたことには疑問を抱くのが自然であろう。そこで、「このことは本当だろうか、どういうことだろう」と学習者に疑問を投げかける。

考えるべきは2点ある。第1は、子どもたちがこの写真のような狛犬の向きを自分たちで変えたとするなら、一体、どのような方法を用いたのか。第2は、子どもたちが向きを変えたのは本当に「このような」獅子・狛犬だったのだろうか。もし、そうでな



図9 神社の社殿前の獅子・狛犬



図10 狛犬（出雲大社常陸分社）

いとすれば、それはどのような獅子・狛犬だったと考えればよいだろうか。

第1点について、出雲大社の獅子・狛犬を確認してみると、社の外にある石造ではなく、図11・図12のような社内にある木造であった。しかし、「木造の狛犬であったとしても図12のような大きさの狛犬であれば、子どもたちだけで動かして向きを変えることは難しいのではないか」と新たな疑問を投げかける。



図11 狛犬(木造)



図12 狛犬

その後、第2の点に進み、子どもたちだけで向きを変えることができる獅子・狛犬の条件について考えさせる。すると、大きさや重さなどの観点が出てくる。そこで、こうした点をグループで話し合わせ、意見を交流した後、奈良絵本『徒然草』(江戸時代前期)の図13を紹介する^{注10}。そして、内容確認として図中の人物(聖海上人、同行の人、神官)の特定(「挿絵の人物当てクイズ」)を行う。それから、図中の左上の獅子・狛犬(○部分の両端の置物)に着眼させる。すると、『徒然草』236段の獅子・狛犬とは、たとえ子ども1人であっても動かせる程度の小さなもの、そして木造のものであったことが明らかとなる。



図13 奈良絵本(井田架蔵書)

こうして問題の獅子・狛犬は、図版類の活用により「大型の石造」→「大型の木造」→「小型の木造」へと大きさ・材質が変化する。それとともに、教材本文の読解が深まっていく。こうした読解の醍醐味は、図13のような図版類が掲載されている教科書の教材の場合、味わうことができない。

これは、教材を学習してプロット(筋立て)を理解した後に、内容理解を自らのものとして内面化する過程、つまり内容吟味の段階で突き当たる壁を乗り越えるために図版類を活用する例である。

3. 4. 2 『徒然草』51段(水車)

『徒然草』51段は「亀山殿の御池に、大井川の水を」で始まる「国語総合」の古文教材である。教科書9社23種のうち4社4種の教科書が本段を掲載している。以下には、東書版の教材本文を記す。

亀山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を造らせけり。多くの銭を賜ひて、数日に営み出だして、掛けたりけるに、おほかた廻らざりければ、とかく直しけれども、つひに回らで、いたづらに立てりけり。

さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかに結ひて参らせたりけるが、思ふやうに廻りて、水を汲み入ること、めでたかりけり。

よろづに、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。

本段の内容は、亀山離宮^{注11}の池に大井川の水を引き入れるために、地元の農民に水車を作らせたところ、大工事の末に失敗した。そこで、水車の名所であった宇治の里人を呼び寄せて任せたところ、容易に

水車を作り上げて水を引き入れることに難なく成功したという教訓（「餅は餅屋」）を内容とする話である。

さて、例えば、三省堂版「国語総合」古典編のように教材が本文だけで、挿絵や写真など何も掲載されていない場合、授業者は予め準備した図版類を活用して内容吟味を行うことができる。

いま、本教材の学習が一通り終了した後、学習者に対して「どのような水車を思い浮かべているか」と尋ねてみる。すると、多くは図14に示すような水車を答える。確かに、現行教科書には見られないが、以前にはそのような写真を掲載する教科書が存在した。しかし、これでは読解に役立つどころか、かえって混乱を招く結果になる。また、図14の水車を思い描いている限り、教材を本当に理解し、読解したことにはならず、それこそが図版類を活用した内容吟味の方法を必要とする所以にもなる。

そこで、最初に51段の水車の機能が「脱穀・製粉」ではなく「揚水」であることを確認しなければならない。そして「では、水車はどのような仕組みで揚水しているのだろうか」と疑問を投げかける。現代の高校生に、鎌倉時代の水車作りの技術について思い巡らせる時間を設けるのである。

まず、授業者は学習者に揚水を可能とする構造の水車を各自のノートに描くように指示する。一定の時間を与えれば、クラスで何人かがアイデアを描き出す。幾つかのアイデアが出たならば、それを交流させた後、板書させ説明させる。説明などが不十分であれば、授業者が補助する。

しかし、もし学習者から全くアイデアが出ない場合、どうするか。授業者は黒板に、川の流れの向きと水車の円形の略図を板書し、円周の部分がポイントだとヒントを与える。そして、この後、奈良絵本の図15を紹介する。確かに、水車の円周に桶を配置した図15のような構造にすれば、揚水は可能である。しかし、実際の、この程度の規模では大井川から亀山離宮の池まで水を引き入れる大工事であったという51段の叙述内容にそぐわないのではないかと^{注12}。

そのように指摘して改めて水車の構造を考えさせた後、例えば、現行の東書版などに掲載されている石山寺縁起絵巻の灌漑用水車の図16を紹介する。そして、再び「しかし、この水車の構造はどうなっているのだろうか」と問いかける。こうなると、もはや古文の授業の範囲を超えていると懸念されるかもしれないが、学習者の関心・意欲はこの絵巻を契機に勢いづいている。そこで、タイミングよく新たに図17や図18を提示すれば、川から水がどのような仕組みで汲み上げられるか、そして水が陸地にどのように運ばれていくかという仕組みが視覚的に明らかとなる。ちなみに、揚水の動画を示すことができればさらに効果的である。

こうして問題の水車は、図版類の活用により「脱穀・製粉」→「揚水」→「小型の水車」→「大型の水車」の順にその機能と構造の理解が進み、本文内容の読解が深まる。



図14 水車（脱穀・製粉）



図15 水車（奈良絵本）



図16 水車（石山寺縁起絵巻）



図 17 朝倉三連水車 (揚水)



図 18 水車の仕組み (揚水)

これは、教材を学習し終わった後の内容吟味の段階で図版類を活用することにより、当時の高い技術や専門家の価値を学ぶなど内容読解を深化させることができる内容吟味の一例である。

3. 5 内容表現

これまでの内容補助、内容確認、内容比較、内容吟味がいずれも既存の図版類を活用するものであったのに対し、内容表現とは学習者に教材本文を理解した内容を自ら図版類、主に絵図で表現させる方法である。この理解内容を絵図などの形で可視化して表現することは国語教室では従前から行われてきた。ここではそれらを導入、展開、まとめの各段階における具体例を通してみていく。

3. 5. 1 導入段階

導入段階では、学習者を教材に引き付け、学習を動機づけることが視覚資料としての図版類の活用目的となる。例えば、「国語総合」の教材である太宰治「富嶽百景」の場合、題名読みの後、下記の冒頭部分を読ませる前に、富士山の絵を学習者にノートに描かせる。そして、級友の描いた絵と比較させる。すると、図 19 のような典型的な富士山を圧倒的に多く描いており、学習者は安心する。次に、例えば第一学習社版に掲載されているような広重、文晁、北斎の絵 (図版類) を確認させると、先ほど描いた富士山と同様であることに学習者は再び安堵する。それから、次の「富嶽百景」の冒頭部分を音読させる。

富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四度くらい、けれども、陸軍の実測図によって東西および南北に断面図を作ってみると、東西縦断は頂角、百二十四度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、たいていの絵の富士は、鋭角である。頂が、細く、高く華奢である。北斎にいたっては、その頂角、ほとんど三十度くらい、エッフェル塔のような富士をさえ描いている。けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろくさと広がり、東西、百二十四度、南北は百十七度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない。

こうすると、多くの日本人が富士山に対し抱いている典型的なイメージや先入観が、富士山の客観的な事実によって打ち碎かれる。その後、授業者は準備しておいた富士山の実物写真を提示する。このように導入段階で学習者の認識を改変させることから、教材「富嶽百景」の学習を始めることで、内容理解、読解指導へと効果的に導くことができる。



図 19 富士山 (イメージ)

3. 5. 2 展開段階

展開段階では、1カットのイラストや連続カットの4コマ漫画など図版類の活用法が考えられるが、ここでは物語の展開に即した絵図の活用法を示す。例えば「国語総合」の教材「検非違使忠明」(『宇治拾遺物語』)の授業では、忠明が京童部から追い詰められ清水の舞台から葦を両脇に抱えて飛び降りる場面を学習者に絵図に描かせることが行われている。絵図に描くためには、本文の次の部分を正確に理解して忠明の行動を視覚化しなければならない。

(忠明) 内へ逃げて、葦のもとを脇に挟みて、前の谷へ躍り落つ。
葦、風にしぶかれて、谷の底に鳥のあるやうに、やおら落ちにければ、それより逃げて去にけり。

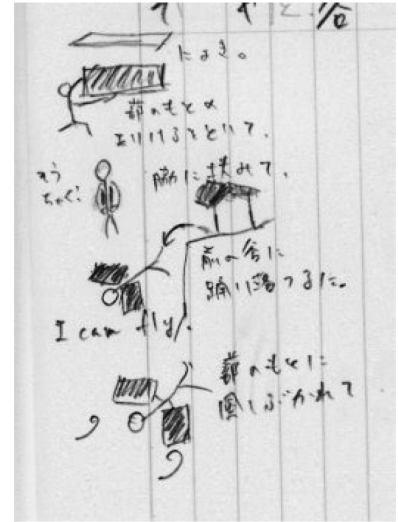


図20 飛び降りる忠明

図20では、谷に飛び降りる忠明の行動を「葦のもとを脇に挟みて」「前の谷へ躍り落つ」「葦、風にしぶかれて」という3段階に分析して図解している。このため、本文内容を正確に理解して表現していることが分かる絵図になっていると言える。

また、高等学校「古典B」の教材である司馬遷「鴻門の会」(『史記』)では、次の部分の理解内容、すなわち登場人物の誰がどこに座っているかの配置図を描かせることは指導の定石である。

項王・項伯、東嚮座、亜父南嚮座。亜父者、范増也。沛公北嚮座、張良西嚮侍。

つまり、項王(項羽)は「東嚮」(嚮=向)ゆえに西に座し、沛公(劉邦)は「北嚮」ゆえに南に座している内容を配置図に描かせるのである。

それから、授業者は次の剣舞の場面において、予め準備した図版類を活用した読解指導を行う。



図21 鴻門会

項莊拔劍起舞。項伯亦拔劍起舞、常以身翼蔽沛公。莊不得擊。

ここは范増の指示を受けた項莊が剣舞に乗じて劉邦の命を狙うが、劉邦に通じている項伯がそれを剣舞で阻止する場面である。まず「鴻門会」(安田靉彦筆)^{注13}を示し、方位を与えた上で図中の「人物当てクイズ」を行う。その後、先の「鴻門会」に書き込みがある図21を提示して人物名を確かめさせる。これは、内容確認としての図版類の活用法の例である。



図22 鴻門の会

さらに、別の構図で描かれた図 22 を提示する。そして、この図中の人物（項王、項白、項莊、范増、沛公、樊噌）をそれぞれ特定させる。これは、内容比較または内容吟味としての図版類の活用法の例である。



楼上で髪を抜く老婆



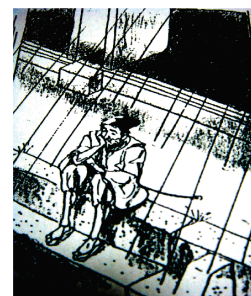
雨の羅生門

3. 5. 3 まとめ段階

まとめの段階では、教材の学習を終えた学習者が理解内容を内面化して、それを他者に伝えるために図版類を用いる。言い換えれば、内容理解からそれに基づく自己表現への転換に役立つために図版類を活用する方法である。内容表現は、このようなまとめの段階における図版類の活用が最もその真価を発揮すると言える。



ねじ倒された老婆



雨やみを待つ下人

図 23 「羅生門」の挿絵

なお、図版類を用いなくて、言語を用いた内容表現を重視する立場からは、例えば、教材「羅生門」の場合、結びの一文「下人の行方は、誰も知らない。」を受けて、その後、「下人」は怎么样了か、その続編を創作させることが常套手段である^{注14}。

しかし、以下では、学習者が絵図を用いて行う発展的な創作について再び教材「羅生門」を例に、内容表現の在り方を示す。

さて、かつて数社の教科書は図 23 に示すような挿絵を本文中に掲載していた。文学教材の内容の絵画化としての挿絵については読解との関係の議論もあるが^{注15}、内容表現として学習者が描く絵図に関しては画力の優劣を除けば異論はないだろう。むしろその絵図は教材内容の読解状況に対する評価規準という点から有効であると思われる。

また、これに関連するものに読書感想画がある。読書感想画中央コンクールの公式サイトによれば、読書感想画とは、本を読んで、おもしろい、いいな、など感じたことや印象をもとに表現した絵のことであり、本を読んだイメージをもとに自分の感動を伝えることを目的に描いた絵である。どうやって自分のイメージを色や形にするか、構図はどうかなど手を動かし頭を働かせることで表現力や発想力、想像力を鍛え、読書体験をより深く豊かなものにするという。

本稿における内容表現としての絵図にもイメージを伝えるという読書感想画と共通する点はあるが、絵として描く対象は読書感想画が読書による自分のイメージや感動であるのに対し、内容表現としての絵図では本文の一場面である。つまり、本文の叙述を正確に読み取り、最も表現したい印象的な 1 場面を形象化させる。これが内容表現としての絵図の活用である。図 24 に「羅生門」の最後の場面、そして図 25 に村上龍

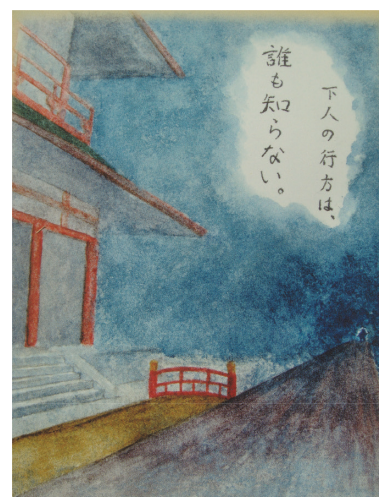


図 24 「羅生門」生徒作品

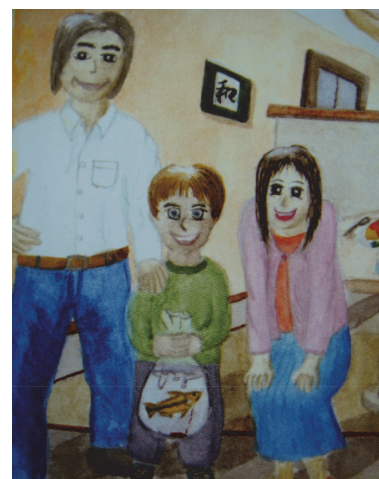


図 25 「パラグアイのオムライス」生徒作品

「パラグアイのオムライス」(大修館版「新編現代文B」)の最後の場面を描いた生徒作品を示す。

このように内容表現では既存の図版類を活用するのではなく、学習者に理解内容、読解内容を自ら表現させる手段として絵図などの図版類を活用するのである。

4. おわりに

本稿では、これまで特に整理が行われず分類されることがなかった国語教材における図版類の活用法を検討し、図版類の機能に着目して分類を行った。そして、それぞれの具体的な活用法を紹介し提案した。

実態として、国語教科書の教材本文に関する図版類には有無や種類の異同が存在している。そのため、図版類がある場合は、本稿で理解補助(語句補助・内容補助)、内容確認、内容比較として位置付けた活用法を意識的に用いることで有効活用できることを示した。一方、図版類がない場合は、関心・意欲、また疑問・発見を誘発することを意図して学習者に考えさせ、読解を深める契機を与える内容吟味として図版類を導入して活用できることを示した。さらに、内容表現としての図版類の活用法についても示した。

今後、国語教材別に図版類を活用した授業の工夫とその実践が課題として残されている。特に古典教材ではその有効性が高いと思われるため、その活用例を質量ともに豊かにしていく必要がある。

注

- 1 三省堂版「国語総合」の教科書のうち「明解国語総合」「精選国語総合」「高等学校国語総合 現代文編」の3種。表1では、それぞれ「明解」「精選」「現文編」と略記。
- 2 教育出版版は京都文化博物館蔵「羅城門復元模型」を「羅生門復元模型」として掲載。
- 3 三省堂版は教材内容の挿絵以外に語句「ガン」「タニシ」「りょうじゅう」のカットを掲載。
- 4 2006年度版中学校国語教科書の「竹取物語」の挿絵についての考察は中島(2007)参照。
- 5 明治書院版「新精選国語総合」は「弩」「しらみ」のカットを掲載。
- 6 大修館版「新編国語総合」掲載。
- 7 室町時代半ばから江戸時代の前半にかけて、御伽草子等の物語に挿絵を付けた絵入り写本。
- 8 2017年度改訂版教科書(本稿執筆時点で未公開1社)を含む9社23種の教科書。
- 9 <http://manapedia.jp/text/1815>
- 10 図13は工藤(1998)によるが、数研版他は別種の奈良絵本徒然草の絵図を掲載。
- 11 今の京都市右京区嵯峨にあった後嵯峨上皇・龜山上皇の離宮。
- 12 現行の東書版は以前の図15から図16に差し替えている。
- 13 <http://search.artmuseums.go.jp/records.php?sakuhin=2642>
- 14 「下人はその後どうなったと思うか。本文の内容に即して、続きの物語を作ってみよう。」(三省堂版)
- 15 例えば、有働(2012)は絵本『スイミー』と教材「スイミー」の挿絵の關係に注目し、挿絵に注目した指導の可能性を検討している。また、平岡(2006)は教科書2社の教材「ごんぎつね」の対照的な挿絵を分析し、叙情的な挿絵よりも写実的な挿絵のほうが読解に有効だという。他方、言語作品である小説の内容を視覚的に限定した挿絵として提示することは学習者のイメージ形成への影響という点で問題があるとも考えられる。

参考文献

- 井上次夫 (2014) 「文学的文章における絵図の新活用 (1) -『徒然草』236段と51段を例に-」『平成26年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表概要集』pp.133-134
- 有働玲子 (2012) 「教材『スイミー』の指導の一考察-挿絵の意義について-」『解釈』58-5, pp.53-60
- 工藤早弓 (1998) 『奈良絵本』下, 京都書院
- 阪本恵美子 (2010) 「挿絵を活用した古典の授業-『源氏物語』若紫巻「小柴垣のもと」の場面を中心に-」『愛媛国文研究』60, pp.54-57
- 中島和歌子 (2007) 「中学校国語教科書『竹取物語』の挿絵をめぐる問題点と可能性-『竹取物語絵巻』昇天図の解釈と分類-」『札幌国語研究』12, pp.25-84
- 平岡雅美 (2006) 「物語文教材における挿絵の機能と問題-『ごんぎつね』の挿絵比較と読解の差違-」『全国大学国語教育学会発表要旨集』110, pp.215-218

図版類出所一覧 (2016. 9. 20 時点)

- 1 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8B%A5%E7%B4%AB>
- 2 <http://www2.kokugakuin.ac.jp/taikai65/tenji.html>
- 3 <http://blog.goo.ne.jp/chikasada/e/021da94e7dbff0592d78574b9ce0635b>
- 4 <http://ameblo.jp/kazue-fujiwara/theme3-10005678374.html>
- 5 <http://blog.goo.ne.jp/goo221947/e/667e9130ac410faef2135122a3a01e15>
- 6 http://www.akane-washingyou.com/2015/04/blog-post_52.html
- 7 桐原書店 (2016) 『国語総合』
- 8 大修館書店 (2015) 『新編国語総合』
- 9 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8B%9B%E7%8A%AC>
- 10 <http://komainu.main.jp/kasama2.htm>
- 11 <http://kougengaku.seesaa.net/article/111758252.html>
- 12 <http://kougengaku.seesaa.net/article/111758252.html>
- 13 工藤早弓 (1998:233)
- 14 <http://blog.livedoor.jp/akiaki217/archives/51509609.html>
- 15 東京書籍 (2004) 『新編国語総合』
- 16 東京書籍 (2014) 『新編国語総合』他、<http://www.geocities.jp/shimizuke1955/3090suisya.html>
- 17 <http://4travel.jp/travelogue/10923816>
- 18 <http://suishakoubou.com/aidworks01.html>
- 19 <http://www.wanpug.com/illust284.html>
- 20 <http://bleuturquoise.web.fc2.com/others/laboratory/nol.html>
- 21 <http://chinaalacarte.web.fc2.com/bijututen-32.html>
- 22 <http://garage359.blog.fc2.com/category6-1.html>
- 23 「国語総合」教科書 (詳細不明)
- 24 小山工業高等専門学校一般科国語 (2009) 「高専生への読書体験ガイダンス」5号表紙
- 25 小山工業高等専門学校一般科国語 (2010) 「高専生への読書体験ガイダンス」6号表紙

